
覇者 風の章

朱音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

覇者 風の章

【Nコード】

N8340F

【作者名】

朱音

【あらすじ】

ここは太陽と月の間の星、アルタ。現在の西暦、今までの歴史は一切不明。そんな不思議な星に住まう少年、千羅は、少年にして最強の強さを誇る、アルタの中で唯一独立した存在だった。そんな彼だったが、彼はその強さを望んではいなかった。「覇者」の原作にあたる長編小説になります。4 / 20 次話更新致しました

第一章

私は・・・何処にいる？私は・・・どう生きれば良い？

誰もいない、何も無い。孤独な闇に置き去りにされて・・・

嗚呼、私は何のために生きれば良いのだろうか・・・。。。

誰が私を必要とするだろうか。

誰が私を分かってくれるだろうか。

自ら孤独ひとりになったんじゃない。

本当は温かいところで、誰かの温もりを感じながら、ただ普通に、静かに暮らしていたかったんだ・・・。

ピチャンツ

暗がりの中で、水が落ちる音がやけに大きく木霊する。

大きな赤い水溜り。

そのすぐ傍に、白い花が咲いている。気高く清い孤高の白花。
穢けがれを知らないその花は、ところどころ、赤に浸食されていた。

「私相手に雑兵ざへいごときをよこすとは 私も随分となめられたものだ」

白い花がゆっくりと動く。

肩に触れる白い髪。風を受けてゆらゆらと揺れる白い耳に白い尾。その姿はまさに狐。

ポタタツ

赤い鮮血が彼の頬から滴り落ちる。彼の強さはもう誰の手にも負えない程になつていた。

「もう誰も、私を止めることなど出来はしない…」

そう言つて恐ろしい表情で笑う彼の瞳の奥には、何故か涙が見え隠れしていたよ
うにも見えた。

ここは太陽と月の間の星、アルタと呼ばれていた。西暦や、今まで辿ってきた歴史は一切不明。誰もが調べようとすらない。彼等にはそんなことは関係ないのだ。彼等にとって歴史とは、生きていくうえで必要としない、ささいなことだった。この星に住まう生命は、フレアと呼ばれる二足歩行で羽の生えた生き物のみだった。かつては沢山の生命が闊歩し、生命に満ち溢れた美しい星だったと伝説に残されているが、いつの日か、異常なまでに急速に進化した生命のみが生きることが出来る、空虚な星へと変わっていった。

深淵の闇に気高く清く咲き誇る白い花 彼の名は千羅と言った。
人々は彼のその白く美しい、まるで狐のような姿から、彼を“白^{しろ}狐^{きつね}”の千羅と呼んだ。

白狐の千羅 アルタを駆ける銀色の風

千羅は群を抜いた強さを有していて、アルタに住まう数千万のフレアの中で、最強と呼ばれ、唯一独立した存在だった。アルタのフレア達はみな、千羅のその異常なまでの強さを疎んだ。彼のその強さは、彼自身が望んだことではなかったのに……

第一章（後書き）

皆様こんにちは、朱音です！

この度新しく、初投稿だった小説「覇者」の原作である長編小説の、本物の「覇者」を連載していく事を決意いたしました！もの凄く長編になります。中々更新できないかもしれませんが、お付き合いいただけると幸いです^^

第二章（前書き）

お待たせいたしましたです！

更新遅くなりましたすみません><;

テストも終わり、やっと一息です

それでは、第二章、お楽しみ下さい！

第二章

私は、いつから孤独^{ひとり}・・・？

暗い、暗い、足元も見えない深い闇。
喻えるなら、千羅はいつもそこにいた。

自分の桁外れの強さを、千羅はよく分かっていた。
そして同時に、ある理由から自分がアルタに住むフレア達と普通に接する事ができない事も、冷静で思慮深い千羅はちゃんと分かっていたのだ。

だから、誰とも関わる事なく一人で生きる事を千羅は選んだ。自分に与えられた悲しい運命を、千羅は決して恨まなかった。それこそ、真に強い者だった。

しかし人である以上、生きている以上、傷つく心を持っている。
千羅は強いが故に、誰よりも大きな傷を抱えた。強かったから、一人で悲しみを抱え込んでしまえたからこそ、心に深い傷を負った。
千羅は強い。強いからこそ・・・脆い。

「嗚呼・・・この世界は、なんて空虚なものなのだろうか・・・」

何もかもが暗いから、旅に出ようと思った。何も変わる筈はないけれど、それでも、希望だけは捨てられなかった。希望を抱いても仕方がないと分かってはいても、どうしても捨てることが出来なかった。

千羅はふらり、一人旅に出た。

誰にも知られないようこっそりと。

彼は風の様に気紛れで、つかみ所がなかった。

そう、それはただの気紛れ。けれどそれは、逃れようのない必然。

千羅が雑兵総勢58名を瞬殺してから一週間が経った。

ここはアルタに流れる情報の中心部、『アルタの泉の水鏡』。今、水鏡を囲むように人が集まり、皆が顔面蒼白になって水鏡を見つめている。

千羅の雑兵瞬殺事件は、当然ながらアルタ各地のフレアへと伝わっていた。そして同時に、千羅が何処かへ謎の失踪を遂げた事も伝わっていた。

アルタの長老が、今回の件についてフレア達に説明をする為に水

鏡の傍に立っている。顔面蒼白でざわつくフレア達とは違い、長老は動揺するでもなく、ただ静かに、眉間に皺を寄せ難しそうな顔をしていた。

「皆の衆、静まれ」

長老の一言で、ざわついていたフレア達が瞬時に静まり返る。皆の視線が集まる最中、長老はコホンと咳払いをし、現状についてゆっくりと重みのある口調で話し始めた。

「皆も知つての通り、千羅は数日前、荊の洞窟を訪れた雑兵総勢58名を瞬殺した」

フレア達が息を呑む。しかし彼らにとっての問題はそこではなかった。

フレア達はじつと長老の次の言葉を待つ。

「そしてその後、千羅は謎の失踪を遂げた。行方はまだ掴めていない」

その言葉にフレア達は一気にざわめく。拳句、恐ろしさから失神する者まで現れた。

「やはりまだ行方を掴めていないのね!？」

「ああ・・・なんてこと!千羅が何処に潜んでいるかも分からないなんて!」

「恐ろしい・・・いつ千羅に殺されるかも知れないなんて!!」

など様々言葉が飛び交っている。

「千羅は齒向かう者には容赦ゆるしやをしない。もしも千羅にとって代わろうとする者が現れたのならば、千羅は迷うこと無くその者を殺すだろう。殺されたくなければ、大人しくしていることだ・・・」

長老は皆に聞こえ渡るような声で釘を刺すように言うと、そのままゆっくりとどこかへ去って行った。

フレア達のざわめき一向に止む気配を見せない。

そんな中、漆黒の眼で静かに水鏡を見つめる少女が一人。
深紅しんくの肩まで切りそろえられた髪が風に遊ばれ静かに揺れる。

「“白狐”の、千羅・・・」

まだ少しの幼さを残す高い声で、少女は呟いた。それはほぼ無意識に、何かを確かめるかのように少女の口について出た。

「・・・懐かしい響きが、私を呼ぶの・・・」

どこか虚ろな瞳は、まるで夢を見ているかのようで。少女の姿はフレア達がざわめくこの情景には、ひどく不釣り合いなもののように幽玄ゆうげんな美しさを醸し出していた。

「会いに、行かなきゃ・・・」

そして少女は、風に紛れるように、ごく自然な動作で、何処かへと消えていった。

+

+

「千羅だ・・・あそこに居るのは千羅だ・・・」

「殺せ・・・白狐を殺せ・・・」

虚ろな瞳、ゾンビのような姿の者達が、千羅を捕らえる。
あからさまな殺気に、千羅はピクリと眉を顰めた。

「はあ・・・折角一人になろうと思っていたのに」

千羅はため息混じりに呟く。

そしてどこからともなく現れた輝く剣を手にし、後ろを振り返った。

「出て来い」

静かに千羅は茂みに言い放つ。その瞳は冷酷無情。

茂みががさつと音を立てる。もう隠れても無意味だと分かった今、
刺客は千羅の前へと姿を現す。

「お前達はっ・・・！」

千羅の瞳が驚愕と悲しみに彩られる。

ザシュッ

雑草も無い枯れた大地に、赤い花が咲いた・・・

第三章

少女は駆けた。ただひたすらに。悲しい目をした少年の許へと。

揺れる梢、囀る鳥、全てが彼女を受け入れた。

彼女こそが、神々に愛された娘。神々が託した唯一の希望。

千羅^{やみ}の為に生まれし光・・・。

歩いていたはずの足は、いつの間にか駆けていた。
嫌な予感が少女の胸をよぎる。

「何だろう・・・この感じ。すごく嫌な感じが・・・」

考え事していると、つつい周囲が見えなくなるもので。

ガッ

雑草や背の高い木が好き勝手に生えている、太陽の遮断された暗い雑木林の中で、少女は何かに躓いた。

「きゃっ!!」

予期せぬ事態に、少女は体制を崩しそのまま倒れこむ。

まあ、俗に言う「躓いてコケた」状態。

「いったた・・・」

一体何に躓いたのか。かなり大きくてぐにゃつとしたものだったような・・・。

気になつて少女は足元を見る。そして目をこれでもかというくらい見開き、顔は真っ青になった。

「え・・・? ひ、人っ!!?」

どうしよう、と少女は慌てふためく。

少女の足元に転がっていたのは、傷だらけの一人のフレア。うつ伏せに横たわっているのに顔は見えない。しかし髪型や服装で男の子だろうと予想はついた。

少女はそのフレアをまじまじと見る。サラサラの美しい銀髪。真っ白な狐の耳に尻尾。

「もしかして・・・“白狐”の千羅・・・?」

ピクリ、と真っ白な耳が動く。

刹那、そのフレアは「う・・・」とくぐもった声を漏らした。

人の気配・・・？

千羅は目覚めたばかりにも関わらず俊敏な動作でバツと起き上がる。

「誰だ!!」

いきなり千羅が起き上がったので少女は驚いて目を丸くする。

千羅が起こした風が少女の深紅の髪を僅かに揺らした。

千羅はまじまじと少女の顔を見る。

漆黒の瞳に、炎髪・・・。見たことない。誰だコイツ。追っ手が・・・？

銀色の瞳・・・すごく綺麗。吸い込まれそう

吸い寄せられるかの如く、二人は見詰め合った。

かくして、二人は出会った。運命を廻す、少年と少女。
風が、変わった。

第三章（後書き）

今回は短いです。

本当はもっと長くなる予定だったのですが、ここで切らないと何だかきりが悪くなりそうでしたので、予定を変更して短くしましたっ！

第四章（前書き）

皆様こんばんは

珍しく早く更新ができてウハウハです
それでは第四章、お楽しみ下さい

第四章

出会いは最悪だったかもしれない。
けれど必ず意味を成す。

何故ならこの出会いは、必然だったのだから・・・

ざあっ

二人の間を風が吹き抜ける。

転んだと分かる体勢と、起き上がったばかりと分かる体勢で見詰め合う、傍から見たら何とも滑稽な二人。

吹き抜ける風にはつと我に返った千羅は、どこからともなく現れた輝く剣を素早く手に取り、剣先を少女に向けた。

「追っ手の者か？随分とお早いご登場だな」

銀色の瞳の奥に怒りの炎を宿しそう言う彼を一目見た時、少女に戦慄が走った。

少女を見る千羅の瞳は凍てつく氷のようだった。その外見はわりと小柄で幼く見えるのに、

千羅が発する凍り付いたオーラは彼を何倍にも大きく見せた。

「追っ手の者はお前だけか。一人なら傷を負っているこの状態でも殺すことは容易いぞ」

今にも襲い掛からんばかりの勢いで、敵を求める獣のように笑う千羅の姿は、この世の悪魔としか言いようがなかった。

しかし少女の目に映った千羅は全く別の姿。少女の目には、そんな千羅が悲しい、悲しいと悲愴な叫びを上げているようにしか見えなかったのだ。

「やっぱりあなたは、“白狐”の千羅なの・・・？」

「白々しいな。何を今更そんな分かりきった事を訊く。私が騙されるところでも思ってたか？」

そう言っただけの千羅は少女に剣を突き立てた。

少女は咄嗟に目を瞑る。

その時、少女でさえも予想しなかった出来事が起こった。

カッ！！

目を閉じていても分かる程に強烈な閃光。

「なっ、何!？」

少女は反射的に目を開ける。その漆黒の瞳に映ったのは、あまりにも予想外の光景。

どこからともなく現れた輝く盾が、千羅の剣を止めていた。

「何だこの輝く盾は!？」

博識な千羅もこの予期せぬ事態に驚愕した。

「『生命の絆』・・・？」

少女が呆然と呟く。

もしこの盾が『生命の絆』の力で出来たものだとすれば、すべて得心がいく。

『生命の絆』とは、アルタに溢れる一種の魔術のようなもの。アルタの何処かに存在すると言われている『生命の樹』と呼ばれる神樹から、フレアが生まれる際貰い受ける祝福の証。樹が幾重もの枝を広げていくのと同じように、『生命の絆』の力も多種多様。しかし根源はたった一つの『生命の樹』。

千羅の剣は千羅の『生命の絆』の力によって創られている。それを只の盾ごときで止めるのはまず不可能だ。だが、『生命の絆』の力を使ったのなら話は別である。

個々の持つ『生命の絆』の力はその心の強さによって決まる。したがってその力は未知数であり、同時に見た目の判断だけでは誰がどの程度強いのかは全く分からないのである。

「見事な盾だ。お前、なかなかの心の持ち主のようだな。この私の剣を止めるとは」

そう言っただけ千羅は敵か味方かもわからない相手に、ほんの少しだけ嬉しそうに、にっと笑った。

「そんなこと言ってもあなたは本気で私を殺そうとはしていないかった。違う？」

問いかけられて千羅は少し目を見開く。そして感心したようにふっと笑った。

「お前、面白いな」

手加減していても、最強と謳われる千羅の強さは凄まじい。それ程の力を垣間見て、千羅が本気でなかった事に気づくのはなかなか難しいことのように思われた。

急に千羅の体を激痛が襲った。今の戦いで少し前に負った傷の傷口が開いたのだろう。

「うっ・・・!!」

激しい疲労感と激痛と共に、千羅は気を失った。

第五章

こちらを向いて、笑っているのは誰？

桜が咲き誇る中で、私に笑いかける影がある。
今となってはもう、顔さえも思い出せない誰か。
嗚呼、此れは、随分前の記憶・・・。

微かな意識の中、千羅は想う。何故今更そんなことを思い出すのか、あれは一体誰だったのか。どれだけ考えても辿り着けない答えを探し、千羅は記憶を手繰り寄せる。この光景が、何故かは分からないが彼にはとても懐かしく、儚く思えたのだ。

これも、『生命の絆』の力なのだろうか・・・それとも・・・

「千羅、大丈夫？しっかりして！」

少女の一声に、千羅は浅い眠りの底から引き上げられる。
うつすらと目を開けると、心配そうな少女の顔が目に入った。

「お前、私の敵…なのか…？」

千羅は訊ねる。いつも周りには敵しかいなかった千羅にとって、自分に敵ではないらしいフレアがいることがにわかに信じられなかったのである。

「心配しないで。大丈夫、私はあなたの味方。あなたを探してここまで来たの」

優しい、心地良い声音。曇りない瞳を見たその瞬間、千羅は彼女を信じようと決めた。

他人を信じる事の大切さ、そして強さを、千羅はよく分かっていった。どんなに自身が傷つけられても、アルタのフレア達が真実のみを話していると信じていたかった千羅。その優しい心こそが彼が『生命の絆』に選ばれた真の理由である。

「そうか…すまない。敵ではないフレアに剣を向けるなど、あつてはならないことだ」

「そんなこと、気にしないで。それよりその傷、治してもいい？」

微笑みながら、控えめに少女は訊ねる。彼女の『生命の絆』は、おもに回復の力である。

千羅はその申し出をありがたく受け取ることにした。

「ありがたい。頼む」

千羅の体に両手を翳すと、少女の体は淡い光を發した。

『聖なる微笑み』

少女が一言回復呪文を唱えると、千羅の体にあつた無数の傷がみるみる塞が^{ふさ}っていった。

少女の力に、千羅は内心ひどく驚いていた。回復呪文でここまで傷をふさぐことができるフレアは、千羅の知る中では数えるほどしかいなかった。流石は千羅の剣を止めただけのことはある。

「そういえば…」

不意に、千羅はまだ少女の名を知らないことを思い出した。

「知つての通り、私の名は千羅。お前の名前は？」

当たり前の質問だった。少なくとも普通のフレアが相手だったなら、ごくごく普通の会話に過ぎなかっただろう。

しかし少女は千羅の質問に困惑した表情を浮かべた後、瞳を翳^{かげ}らせ俯^{うつむ}いてしまった。

予想外な少女の反応に、千羅も何か気に障ることも言ってしまっただろうかと困ってしまった。

すると少女はぼつりと、微かな呟きにも似た声で

「…わからないの。私の名前が何なのか…。私には一部のキオクが欠けてるの」

と悲しそうに告げた。

千羅には、そんな彼女に何と声をかければいいのかなど、知る由^{よし}も無かった。

心配や同情の言葉を並べたところで、そんなものは何の意味も成さないのだとよく分かつていたから。彼女が今までどれだけの不安を背負い、恐怖を感じ生きていたのか、千羅の想像などでは絶対に計り知れないことを理解していたから。

「だから、私のことは“ことり”って呼んで。この名前、とっても気に入ってるんだ。遠い空の彼方まで羽ばたいていけそうで…」

そう言って“ことり”は笑った。

彼女が深い孤独の淵で下した決断、それはただその先に待つ未来だけを見つめ、前へ進むことを強く望む彼女らしいものだった。

失われた過去に執着したりしない。名前が無いのなら、自分で作ればいい。

それが彼女の考え方 言い換えれば、彼女そのものだった。

未来に向かって歩むことを望み、決して希望を捨てない強さ。彼女が『生命の絆』に選ばれた理由はそこにある。

にこにこと笑っていることに、千羅はそれ以上彼女のことを尋ねたりしなかった。

千羅にとってはそれだけ知れば充分だったし、彼女が自分から話す訳でもないのにいちいち聞くこともないだろうと思ったのである。

そんな不思議な出会いこそが、アルタの歴史を揺るがす始まりだったのだ。

白狐の千羅
アルタを駆ける銀色の風
紅凰のことり 風を
誘う紅の炎

第五章（後書き）

こんばんは、何とか更新できました、朱音です

今回の章は、終わり方が非常に微妙なのですが・・・ええ微妙なんですはいorz（ええっ

変えようと思ったのですが上手い終わり方が思いつかなかったんです；すみません><；

この次のお話は多分終わりっぱい終わり方になる・・・はず

ところで、タグのやり方がイマイチわかりません；

ブログを作ったので、タグを貼り付けたつもりなのですが・・・思うようにいきません・どなたか詳しい方、やり方を教えていただくと嬉しいですよ><。

とりあえずこちらにも載せさせていただきます

幻想の欠片

<http://mblog.tv/crimsonbird/>

連載中小説の小話や、朱音の日常などを書いております。足を運んでいただけると嬉しいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8340f/>

覇者 風の章

2010年10月28日06時08分発行